

紀上 596^P
598^P

所お 風土記 527^P
贈 44 屋村条
⑧ 3048 3/4 紀上 596^P

866^P

記(四) 31^P 紀上 43^P 157

云 230^S 紀上 40^P ほう 小林 465^P
497 旁 かためら 989^P 3/4
⑧ 981^P 紀上 40 457

熊會のよう二に二字でなく

改行

改行

(四) 球磨贈 奈良時代の人々がクマソを肥後国の球磨と

(一) 西海道風土記(甲類)はクマソを熊龍

帯 和銅六年日向国から分れたの名がある

果贈 西郡 奈良郡東部 国分市を含む

ソにつりては大隅国贈於郡 今の鹿児島

熊本果球磨郡の地名がある。の名がある

クマに当る所として、肥後国球磨郡(今、

熊會国があつたと述べている。(記、国生み条)

古事記は、筑紫島に筑紫国・豊国・肥国・

波文庫(四三七〇)四三頁、注記参照

のことは、だううとか、言われ

・狗奴国は、球磨のことであううとか、熊襲

と記載してゐる

其の官に狗古智卑狗有り。女王に属せむ

其の南に狗奴国有り、男子を王と爲す。

国々の名を列挙した後、引き続いて

魏志倭人伝は、倭国内にある三十ばかりの

狗奴国

其の餘の旁國

小林 465^P

天つぎ
改行

大隅国の国分市あたりの
域だ、と理解していった
贈^そ於^お合^あ合^あせた地^ち

という。日本書紀(五)岩波書店、五九六頁
参照 第136回 免田式土器分布 第1回(南九州の墓制分布) 大隅

だが、日本書紀においては、クマ^{くま}及^{およ}び
ソ^そに^につ^ついて、いろいろと用法上の混乱が
認められるといわれている。(日本書紀(五)日本古典文学

大系、岩波書店、五九六頁、補注七一(参照)

(一)薩摩半島に、倭人達の投馬国(設馬国・

殺馬国)および大来目達の軍人国があり

(二)肥後国球磨地方 狗奴国

(三)大隅国贈^そ於^お郡^{ぐん}あたりに、贈^そ於^お国^{くに}がある

たの^{たの}あ^あう^う、

ところで魏志倭人伝に、
其の官に狗古智卑狗

が男子であつたとか、

という者が居たとか記されてお

国の内情が、当時の倭国においてかなりよく

知られていた様子がうかがえる

へ倭国の領土、北へ広がるの項において既述

狗奴国と倭国とか、徹底的に憎しみ合

対立して、というわけではあるまい。

867^P

贈^そ於^お空^{くう} 紀^き上^{じやう}596^P
③3048^P-3/4 天つぎ
改行

③910^P 倭^や ③811^P 倭^や ③811^P 倭^や

Г.И.ОТ, 30.5

1959 免田村王果店

書引 熟(2)

か、日米友好同盟152^P

天の御印 889P

銷

大伴氏の遠祖である日臣命が、大来目を率
 いて、薩摩半島の南端から球磨地方を駆け抜
 け、八代・宇土地方へ猛進撃していった。
 ものならば、薩摩地方や球磨地方と、倭国
 とは、強い絆で結ばれた友好的な関係にあっ
 た。

大伴氏の遠祖である日臣命が、大来目を率
 いて、薩摩半島の南端から球磨地方を駆け抜
 け、八代・宇土地方へ猛進撃していった。
 ものならば、薩摩地方や球磨地方と、倭国
 とは、強い絆で結ばれた友好的な関係にあっ
 た。

式土器は、宇土半島基部を中心として、北は
 熊本県菊池郡そして佐賀県付近まで、南は熊
 本県球磨郡かう鹿兒島瑞岸や沖縄にまでも広
 がうてゐる。かし、大隅(贈於国)からは出土しな
 いという。(第七章倭國の領土北へ広がる)希に、既に
 また、熊曾という一つの國があつたので
 はなく、倭人庫が二つの國を併せて、球磨贈
 於と呼んだだけなのだろう、と推察される。
 知られてゐる通り、狗奴國の官・狗古智卑狗は、
 熊本県の菊池(久々智)を拠矢としていたの
 であらう。とする見解がある。(岩波文庫「四三〇」
 一見、なかなかおもろい推論であり、ついに
 へそうに違ひない。と思ひ込

570[°] 869-1/2
 196[°] 115[°]
 156[°] 570[°]
 大久米の二入 記号 115[°]
 入米の子5か 118[°]16[°]

・しかし、この説は、狗奴国の一官職の男の名曰狗古智卑狗と、日菊池とという地名とを、語呂合の的に単に結びつけてみただけのことのようである。

・この物語において採用しない。

①では、狗奴国の狗古智卑狗について、とう考えたらよいのだろうか。

・もしかしたら、へ狗古智卑狗は、倭国と狗奴国へ球磨地方との接点にあつて、仲立ちをしていた男の名であつた。

のかも知れない。

・倭国への渡来が、たつたので、倭人達から、倭国風に曰狗古智卑狗（考）と呼ばれ、親しまれていたのではなからうかと、と想像され

②倭国に渡来した中国人が、狗奴国へ球磨地方から来た曰狗古智卑狗の異様な容姿に興味を持て、その名を尋ねたところ、

井上(上) 193^P 紀上209^P 皇軍 紀上194^P 11^時 紀上110^時 巻きたる 869^P-2/2
 紀上208^P 末 ⑦42^P 同文 長髓彦 ⑤51^P (昔かき) 869^P-2/2

「では」 ⑧869^P-1/3, 871^P
 紀上192^P 201^P

見屋媛(三炊屋媛)を娶つて可美真手命(つまり物部氏
 妹の三炊屋媛(亦の名は長髓彦、亦の名は鳥
 ありは、
 饒速日命(物部氏の遠祖)が、長髓彦の

ありは、
 ありは、
 ありは、

倭国的な名で呼ばれ、
 倭国的な名で呼ばれ、

長髓彦は、皇軍と敵対していたのだから、
 長髓彦は、皇軍と敵対していたのだから、

についで、
 についで、

長髓彦(神武記)
 長髓彦(神武記)

登美能那賀須泥毗古(神武記)
 登美能那賀須泥毗古(神武記)

それでは、
 それでは、

同く、
 同く、

思われる。
 思われる。

ともあれ、倭人達は、その男の名を倭国流
 ともあれ、倭人達は、その男の名を倭国流

といふことなのかも知れない。
 といふことなのかも知れない。

と答えた。
 と答えた。

狗奴国の狗古智卑狗と申します。
 狗奴国の狗古智卑狗と申します。

倭人。
 倭人。

こと

の祖^そを生^うんだ
 とい^うことと関^{かん}連^{れん}があるの^かも知^しれ^ない^や

詳細^{しゆじゆ}は分^わらな^いや

三^{さん}う^うた血^{けつ}縁^{えん}関^{かん}係^{けい}があ^あつたの^ので
 倭^わ国^{こく}大^{だい}乱^{らん}後^ご長^{なが}髓^{ずい}の男^お系^{けい}の子^こ孫^{そん}に
 日^に長^{なが}髓^{ずい}

房^ぶと^とり^りう呼^よび名^なが与^あえ^えら^られた^た

そ^そこ^こで^で長^{なが}髓^{ずい}房^ぶの祖^そ先^{せん}も^もまた^た日^に長^{なが}髓^{ずい}房^ぶと

孫^{そう}さ^さ小^{せう}た^た

と^とい^いう^う経^{けい}縁^{えん}があ^あつたの^のか^かも知^しれ^れな^ない^い

こ^こう^うい^いた^た血^{けつ}縁^{えん}関^{かん}係^{けい}があ^あつたの^ので^で倭^わ国^{こく}の^の敵^{てき}

で^であ^あつた^たと^とは^はい^いえ^え後^{こう}年^{ねん}

日^に長^{なが}髓^{ずい}房^ぶ

と^と呼^よば^ばれ^れる^るよ^よう^うに^にな^なつた^たの^のか^かも知^しれ^れな^ない^いや

詳^{しゆ}細^{じゆ}は^は分^わか^から^らな^ない^いや

こと

【拘奴国】

「新・倭国」(1) - 68頁下へ

871^P

■倭人達は、極南界に位置する《(南の) 奴国》に都を置き、九州北半および山口地方一円の地に『三十余国』(「(北の) 奴国」(博多あたり) など三十ばかりの国々) を配置したのであろう。

①なお、『魏志倭人伝』の記述から、

《倭国三十余国の南には『狗奴国』(球磨) があり、東には『海』(周防灘) があって、その海の向こうに復た国(倭人達の領有域に属する周防・長門) があつた》

というふう理解できる。

●『魏志倭人伝』は、

(1)「其の(倭国三十余国の) 南に狗奴国有り、男子を王と為す。其の官に狗古智卑狗有り。女王に属せず」

→ → →
(2) 「女王国の東、海を渡る千余里、復た国有り、皆倭種なり」

と述べている。

②ところが不審にも、『後漢書倭伝』には、

「女王国より東、海を度ること千余里、拘奴国に至る。皆倭種なりと雖も、女王に属せず」

とある。

●どう読み取るべきなのか、「意味」がもうひとつ判然としない。

●たぶん、何等かの文言が欠落しているであろう。

■そこでこの物語では、『魏志倭人伝』と『後漢書倭伝』とを併せ考え、次のように解釈してみたい。(以下、第2図参照)

●もともとの原本には、

①倭国の南(球磨あたり)に、「拘奴国」がある。

②女王国の東、千余里の『海』(周防灘)の向こうには、倭国の領有地(山口地方)があつて、倭種(倭国に属する者達)が住んでいる。

③女王国より東、千余里の『海』(豊予海峡)の向こうには、「拘奴国」(中国・近畿地方。当初の弥生人の子孫達の国)がある。

H30(2018)1.30(木)~2.3(日)

正

873^P

④南^{みなみ}の「狗奴^{くぬ}国^{くに}」も、東^{ひがし}の「拘奴^{かぬ}国^{くに}」も、女王^{じょおう}に属^{ぞく}さない国^{くに}である、
といった趣旨^{しゅし}の文章^{ぶんしやう}が書^かき綴^{つづ}られていたのではなからうか、と想像される。

*

「荒筋」第一編「成務天皇」^{せいむ}において既に^{きん}詳しく考察^{くわくさ}したい

830 新ヤ(小)-68^P

日本列島

極南界の倭奴国と、箕子遼の国との間に

この東海の島の西域で内乱が続いてる

ら
う
ら
に
ま
で
も
伝
わ
る
て
い
る
た


た国々を次から次へと併吞し、その領域を^水広げ

といふのである。

す
わ
に
そ
と
はⁿ
か
り
に
拘
奴
国
の
人
々
は

総毛を逆立てて身構えた

「俺達のこの国にまでも攻めてくるのでは」

な
か
か
ろ
う
か
L
た
ら
い
い
ん
で
ー
よ
う
L

「箕子達より、すい分と強いようだな」

7
恐ろしいわ

今人なる時、延鳥郎が新羅(辰韓)から

この地方(中国地方)へ降りて来た

それは、西暦一五七年のことであつたという

フ
まり、
倭
国
大
乱
（
一
四
七
？
一
八
八
頃
）

H18(2006)8.9
42770K⑥

あさひ 小杯
一日 1P

御くらに入れたのかニの目か?

2145 157年(6カ)
東洋史行 835 阿達羅王

三〇〇〇市 918 紀589P

あさひ 阿達羅 三〇〇〇市(1)-39P

875P

1214P

か勃発し、
れる。(第一表参照)
た直後当時の出来事であった

〔高句麗の僧一然(二〇六〜二八九)の撰〕

朝鮮の史書曰三国遺事は、三国史記に漏
れた事項を集録した書物である。(「広辞苑

へ三国遺事参照)

この書曰三国遺事の卷一、延島郎・細島
女の条に、二人な記述がある。

均等

三国史記(1)-39

丁酉

「新羅第八代阿達羅王の四年(一五七)に

西の東海の浜に延島郎・細島女の夫婦があつ

た。一日、延島郎は一嶽に乗って日本へ渡つ

た。日本人は、彼を非常の人として、王と

した。細島女は夫の帰らぬのをいぶかり、夫

を求め、またその嶽に上って日本へ渡り、夫

婦再会、女は貴妃となつた。このとき新羅で

は日月が光を失つた。日者は奏して、日月の

精が我国(新羅)に降つて在つたのに、今や

日本へ去つたので、この日月光を失うといふ

877
10行に
合せ

1011

改行

大カワ 1721 絹 590~591 大カワ 590~591 大カワ 590~591

小林 輝 951 810

876

875 2145

事変が生じたのである、と言った。王は、使
をつかめて二人を求めた。延島は使者に、

「自分がこの国（日本）に到ったのは、天の
然らしむるところである。今、どうして帰ら

ぬよう。自分が、自分の妃（細島女）が織った
細絹がここにある。これをもって天を祭った

うよかう。その細絹を使者に与えた。王が、
と、その細絹を使者に与えた。王が、

使者の報告のとおりにした。日月はまた旧
の如く輝りかがやいた。その細絹は、御庫に

あさめられ、国宝とされた。また、その庫は
貴妃庫と名づけられた。天を祭った地を、迎

日果（また都新野）という
日本古典文学大系、岩波書店、五八九頁参照

「新羅第八代阿達羅王の四年（一五七）に
延島郎が新羅から日本へ渡った。日本人

は、彼を非常の人として王とした。
と、いうのである。

延島郎は、後に日本国（日辺国）と呼ばれ
近畿地方で王になったのだらう。（以下、第一、二、三表参照）

近畿地方で王になったのだらう。（以下、第一、二、三表参照）

延鳥郎の口郎の字は、吳音・漢音とも「ヘラウ」と訓む。(「大字典」上田万年、講社へ郎参照)

この物語では、「エ・ン・ウ・ラウ」を少し縮めて、「延鳥郎」と表記した。

※なお「倭人達」は「延鳥郎」およびその子孫を「ウ・ラ」と呼んだように思われる。(後述)

※因みに述べると、

(1) 口才太郎畑と書いて「さいたらばたけ」と訓む。

(2) 宮城県民謡「斎太郎節」は「さいたらば」と呼ばれている。

という。「広辞苑」へ「才太郎畑」へ「斎太郎節」参照。

(福島県北部に「安達太郎山」がある。(「安達大良山」とも書く))

それでは、先述の「三国遺事」巻一、延鳥郎・細鳥女の条に、注釈を加えてみよう。

(新羅第八代阿達羅王の四年丁酉(一五七)新羅(辰韓)の東海の浜に「延鳥郎・細鳥女の夫婦が住んでいた。ところがある日、延鳥郎は「一歳(ハハ)は岩(イワ)に但し(タシ)ては船(ふね)の名(な)か」に乗り、後に「日本国」(「日川国」)と称さるることとなる地、中国地方へ渡った。

その地の人々(朝鮮半島から渡来した当初の赤金人達)は「新羅」からやってきた彼を「

に、細絹をもつて天を祭った。すると、日月
はまた、旧の如く輝りかかやいた。
そののうち、その細絹は御庫におさめられ、
国宝とされた。また、その庫は貴妃庫と名づけられた。
天を祭った地を迎日県（また都
祈野）と呼ばれたという。
といった意味であらうか。

ともあれ、極南界の倭奴国が、次第次第に
箕子産の国を侵食していった。丁度その頃、

「非常の人として迎えられた延島郎は、
人々の熱狂的な支持を得て、その後代の日辺日
本国（中国・近畿地方）の王となり、絶大な力
を持つに至った。めでたいうらやましい。

こうして倭国の領土の拡大を、山口県と
広島県の県境あたりで辛くもさえぎり止める
ことが出来たように想像される。

しかしそれにして、延島郎はどうしてそ
うなにもすんなりと何の抵抗もなく、日本列
島中央部（中国・近畿地方）の人々の王とな

「ニウ」ダブリ

879^P

「ところか」
873^P 1/2
904^P

1803^P

大正 1331^P

35

1061

398

り得たのであろうか。
■そこには「たぶん」次のような歴史的背景が
あったのであろう（以下「参考文献」）
●その昔（前300年頃）「遼寧地方から襲
いかかっていた箕子達に土地を奪われた朝鮮
半島の住民達は、大挙してこの日本列島へ渡
来し、先住民（縄文人等）を追ひ払い、こ
の地を「拘奴国」（「韓国」）の一地方と見なし
て統治した。
●扶余系殷民の子孫
●こうして、日本列島（九州・中国・近畿・東海地
域）に弥生式文化の時代が始まった。
●ところが、弥生時代前期半ばの前一八〇年
頃、あの一憎人でも憎みきれない箕子達
が後を追うようにやってきて、日本列島
西端の北九州・山口地方を、あつという間に
奪い取ってしまった。
●こうして、これより以降、広島県と山口県との
県境あたりに国境線が引かれ、東の「拘奴
国」（「韓国」）と西の「箕子達の国」とが、対峙し続
た。
●この両国が「睚眦」あいに敵対し合うのは
いぬば宿命づけられ、ついに「つ」も過言で

やってまたこの度12所
とうら
東来 紀土589 本の10行

つか
大を相む
(人にも一む)
武勇 1961
382 1152
880 P - 1/2

類文
874
ヤメル

無気味 1925P
攻略 162P
せめけるこ

改行

あるまい。

その後、倭国大乱（一四七〇一八八頃）

が勃発した。箕子達の国の極南界の倭国が

日本列島西部地域（北九州地方）にひめく小さな国々を次から次へと

攻略し、無気味にも領有域を大きく拡張して

拘奴国の方へと迫って来るという。

箕子達より強大な力を持つ倭国

が、国境を超えて我々の国へと襲いかか

てきたらどうしようか

人々の恐怖心は高まっていった。

拘奴国の人心が動揺していた

そんなにもこの非常の時に、母国の地であ

る朝鮮半島から、延島郎がやってきた。

延島郎は武勇に優れていただけでなく、

心を巧みに掴んで全国土を統率する並々ならない

能力を持ち、さらに国王としての風格も備え

ていたのであろう。

朝鮮半島からの渡来人である拘奴国の人々

（中国・近畿地方の人々）は、いま、国家の

存亡の時に當りて運命を共にしていた。人々

はこの難局を乗り切る為、祖国から到来した延島郎を喜び迎

危機ともいえる

22

880^P-2/2

920^P

HL

え、その力量を信じ、王として迎え入れた。

て、固く一致団結し得たのだ。出来たのであ
ろうと思われ。

●

● 倭国は、延鳥郎を中心とし

① 倭国は、従前から、祖国である朝鮮半島
の新羅（辰韓）と深い誼を結んでいた。

② 倭国大乱（一四七）一八八頃）が勃発
してまもなく、新羅王の血筋を引く延鳥郎が
中国地方へやって来た。

中国（新羅）地方

③ 倭国の人々は、延鳥郎を王とした。

④ 倭国王延鳥郎は、細絹を新羅第八代阿達
羅王に送った。

⑤ 倭国は、新羅国の属領であるとい
うことを正式に表明した、

ということであつたのかも知れないが、詳し
くとは分らない。

米

使い果たし
もはや
⑧882-1/2末
いたな
夏X<118
16にわ
侵入
1160
824
形相
573
4-1
決死
693
881^P

かえ
区り討ち
367^P
「こうに」
879
205
207
879
107
後漢書58^P
決着
694^P

倭国に、
倭人達は、
箕子達の戦いに勝った。
（後漢書倭伝）
主無し、
という状態が続いた。
（後漢書倭伝）
倭国の大乱（一四七）
一ハ八頃（一四七）
は、
なかな
か決着がつかなかった。
更く相攻伐し、
歴年
争ひつゝ、
倭人達は、
箕子達の国を
奪い取った。
山口地方の
一帯におよんだ。
と、その時、
山口地方と
広島地方との
あたり、
大きく立ち
はだかつた。
者達がいた。
来るなら来い。
返り討ちに
してやろう。

キョウノミカドをかく

33

すま
凌ま
はけ
激し

みかま
身構え

2
2107

大正

$$882^{\frac{1}{2}} - \frac{1}{2}$$

941^r 对抗
「相対抗」

2292^P

峻烈な闘いの睨み合いが始まった。

箕子^{きし}の國を奪^{うば}ひ取^とつた^ら日倭國^{にっぽんこく}は北九州^{きたきゅうしゅう}
 山口^{やまぐち}地方^{ちほう}と延島^{のほし}郎^{らう}を王^{おう}として身^み構^{かま}える^る
 日^ひ泊^{かぬ}奴^ぬ國^{こく}は¹⁸⁴³中國・近畿^{きんぎ}地方^{ちほう}とは水^{みづ}と油^{あぶら}
 のように相互^{あひたひ}目^めした。

大なる倭国に對抗する為、心を合わせ、急

速に力を蓄えてゆき、
て、倭国と互角に争う屈強な国へと変貌をと
げたのではなからうか。

な お、延鳥郎の女国である新羅国（辰韓）
から、大々的な支援があつた。とであらうと

規察之水。

うして ~~あんな~~ ふうになると、
 といえども、 ~~あんな~~ 容易に
 東の ^{ひがし} 力を ^{ちのち} 誇る ^{たう} 日
^か 拘奴 ^ぬ 国 ^{めい} 倭国 ^こ くに
 を

「
本は
L
前
18行

882^P-2/2

せ 競 争 1256^P 881^P 新 討 伐

討ち争うけるのは容易でなかつた。
東西二国間の激しい競争は、いつ果て
るともいえず、延々と続いている。
た。(第一、三表参照)

*

draft
350

「それでは、⑧876-3/2

883

銅剣、銅斧
不要
1981

やりがちな

鎧 七代目(3)丸川

あい
相容水す

元

④ 1790-⁵/₁₆ OK

東の国・韓国の都

互いに決りて相容れない東と西の異質な

文化が――はからずも互いに切磋琢磨ト
それぞれ独自に

発展してゆくことになった。

① 中国・近畿地方の△銅鐸△に代表される当

初
の
弥
生
人
達
の
文
化

② 北九州・山口地方の公高床式住居・高床式

墳墓
に代表される倭人達の文化

の東西二つの文化は、
牙水ぞ水に爛熟の時を

迎え来る
マコトなる

米

では、銅鐸文化圏を形成する。拘奴国は

中心となる
都は、
一体、
この
の地に置か

だ
う
う
か
。 | |
つ
ま
り、
延
鳥
郎
は
何
処
を
居
城

と
い
た
の
で
あ
ろ
う
か

いうまでもなく、
今となつては解らない。

「決」
この頁4行

889

コクヨ ケー20 20×20

類析都

842

气水气水

新(2) 339^P素環頭大刀
888^P 287 (二)

884P
 883P
 886P
 887P
 888P
 889P
 890P
 891P
 892P
 893P
 894P
 895P
 896P
 897P
 898P
 899P
 900P
 901P
 902P
 903P
 904P
 905P
 906P
 907P
 908P
 909P
 910P
 911P
 912P
 913P
 914P
 915P
 916P
 917P
 918P
 919P
 920P
 921P
 922P
 923P
 924P
 925P
 926P
 927P
 928P
 929P
 930P
 931P
 932P
 933P
 934P
 935P
 936P
 937P
 938P
 939P
 940P
 941P
 942P
 943P
 944P
 945P
 946P
 947P
 948P
 949P
 950P
 951P
 952P
 953P
 954P
 955P
 956P
 957P
 958P
 959P
 960P
 961P
 962P
 963P
 964P
 965P
 966P
 967P
 968P
 969P
 970P
 971P
 972P
 973P
 974P
 975P
 976P
 977P
 978P
 979P
 980P
 981P
 982P
 983P
 984P
 985P
 986P
 987P
 988P
 989P
 990P
 991P
 992P
 993P
 994P
 995P
 996P
 997P
 998P
 999P
 1000P

前説、証明のようになく、定かならないこと
 であるといえよう。
 いかしながら、とりあえず、
 延島郎は、吉備国吉備郡総社あたりに都
 を定めた。
 と仮定してみよう。
 広大な吉備国（備前・備中・備後・美作地
 方の古総）の中心地が吉備郡であり、吉備そ
 の中心地が総社であつたかも知れない
 と思われ、からである。（吉備国総社参考）
 参考までに、口総社についての解説を
 みておこう。
 かなり時代がくだつたころ、この地口総社
 は備中国の中心地であつたといひ、国府が置
 かれ、敏衆と伝へる。そして総社明神は、国司
 が参拝する便宜の爲に、備中国惣三百二十四
 社（総三百二十四社）の祭神を、一ヶ所に集め
 て祭つたものと云ふ。今は県社である。
 地名辞典、太田爲三郎、名著出版、《総社》参照
 され、以前に、この地口総社が何という名
 で呼ばれてゐたかについて、明らかでない。

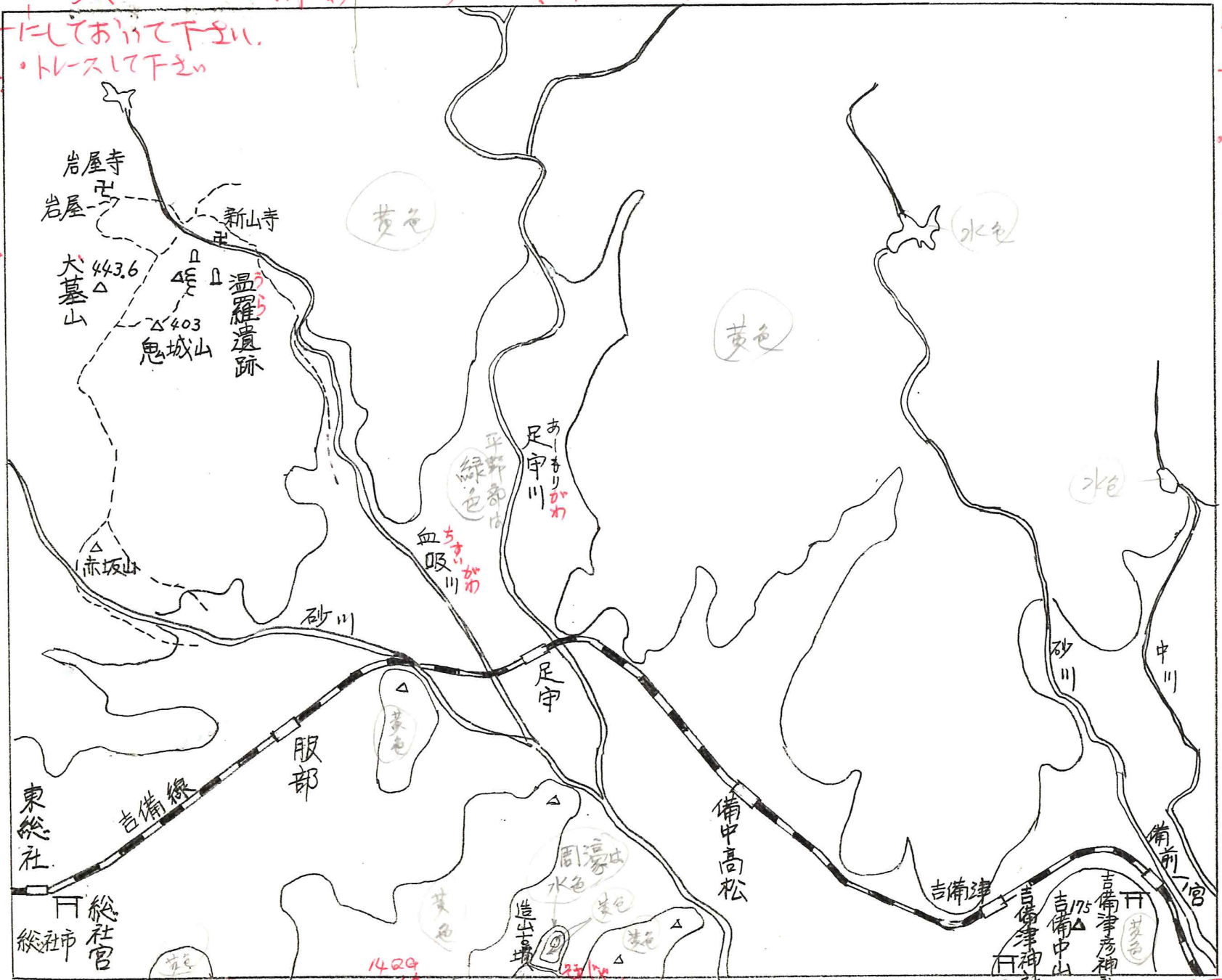
米

あたりの地域

「新・おたけ物語」(2)9頁、第56図と同様の885^P 右頁上粉に、限度一杯、大きく掲載したい。文字は全てゴ4

カラーにしておいて下さい。
 ・トレースして下さい。

↑
 旅 113^P F
 に同様の地図
 がある。



川と鉄道を、
 もう少し太い
 線にしておいて
 下さい。

「寺」2ヶ所
 の113^P
 の2693^P-1/1

↑
 枠
 ト
 ル

ちすい6ヶ
 血吸川
 旅 112^P

足守 地図
 駅名

844^P
 至岡山
 この神社を
 ゴ4に
 において下さい。

1429
 総社宮とゴ4に17F
 第226図 総社東部 (国土地理院、1:25,000地図参照) 844

④2693^P-1/2

大々49
理 1486
紀上 362

紀上 243
記 127

886 - 2/2

施 114

施 113 樂樂福神社ともあ？
1803-3
11213 改行

後 112
448
612

釜^{かま}で煮^にて喰^くい、わがもの顔^{かお}に暴^あれまわ^わつて

いた^い。ちの皇子^{みこ}曰^い吉備津彦命^{きびつひこのみこと}

早^さ速^さ、大和^{やまと}の天皇^{てんかう}が、気^きはやさーく^くて力持^{ちからもち}

ちの皇^み大^{おほ}吉備津日子命^{きびつひこのみこと}とも伊佐勢理毗古命^{いさせりひこのみこと}と

もいう^いを温羅退治^{うらたいち}に遣^{つか}わされた。部下^{ぶか}の大^{おほ}

養^や夕ケル^{ゆけ}は犬^{いぬ}を使^{つか}つて温羅軍^{うらぐん}を吠^ほえ脅^{おど}し、留^{とめ}

靈^{たま}臣^{おみ}(猿^{さる})は兵糧^{へいろう}を集^{あつ}め、栗々森彦^{ささもりひこ}(雉^{きい})は

弓矢^{ゆみや}を造^{つく}り、片岡夕ケル^{かたがゆけ}は楯^{たて}築山^{きそ}に大^{おほ}き

な石^{いし}を幾^{いく}つも並^{なら}べて敵^{てき}の矢^やを防^ふぐ楯^{たて}に^{した}。

こ^こうして西軍決戦^{さいぐんけつせん}の時^{とき}を印^{むか}えたとい^いいたの

であ^あうう^うと^とい^いう^うの^ので^であ^ある^る。

な^なお、孝^{こう}靈^{りゆう}記^きに

孝^{こう}靈^{りゆう}天皇^{てんかう}の御子^{みこ}の一人^{ひとり}である比古伊佐勢^{ひこいさせ}

理^り毗古命^{ひこのみこと}(亦^{また}の名^なは大吉備津日子命^{おほきびつひこのみこと})と、弟^{あとうと}

の若建吉備津日子命^{わかたけきびつひこのみこと}とが、協力^{きょうりき}して吉備国^{きびのくに}を

平定^{へいぢやう}した^{した}。

と述^のべ^べら^られ^れて^てい^いる^る。

も^もと^とも、恐^{おそ}ら^らく奇^き妙^{めう}に思^{おも}わ^われ^れよう^{よう}が、こ^この

物^{もの}語^ごに^にお^おい^いて^ては、

本^{ほん}来^{らい}吉備国^{きびのくに}を平定^{へいぢやう}した^{した}曰^い伊佐勢理^{いさせり}命^{みこと}

命、^{また}示^{みな}の名は^{おほきびつひこのみこと}大吉備津日子命と、弟の若建吉
備津日子命が協力^あって、吉備国を平定し
たし
と記述したように想像される。

^ななお、^口古事記^にによれば、吉備国平
定は孝靈朝（^{あろ}弥生^{やよい}前期の^{あろ}前二九〇^{あろ}前二一五
の^{こと}とされて^いる^か、^{あろ}しかし^{あろ}弥生前
期の^頃に^{あろ}大和朝廷が^{あろ}吉備国を^{あろ}平定したとは考えにくい
^{また}、^{あろ}第一表^にによれば、^{あろ}孝靈天皇は^{あろ}六世紀
末頃の^{あろ}日辺^に日本国の^{あろ}天皇であ^あった^あよう^にに^あ解^あさ
れる^あが、^あそれ^あほど^あ遅^あい^あ時期^あに^あ吉備国^あ平定^あが行^あわ
れた^あと^あ考え^ある^あこ^あとも^あ出^あ来^あない。

*

888P

2695P
638P

同
883P
素環頭大刀新(2)-339P

ともあれ、この物語にありは、
へ「桃太郎」は、素環頭大刀・高床式住居
などの文化を持つ倭人達が、
を中心とする銅鐸文化圏（中国・近畿地
を併合した頃の話を基にしている）であろ
う✓
と考えてみたい。（第3表参照）
なお、銅鐸文化圏の崩壊については、第四十
四章「東の拍奴国壊滅」、第四十五章「母国の
国譲り」において述べよう。

*

高塚式墳墓

「ところで」
⑧ 868P
⑨ 904

⑦ 768P
日本書紀 44

紀上 260P
(記号 199P)

この頁1行の奥縁で
「いた」ではおかし

紀上 278P

紀上 260P
1 889P

故交(1)
交因(1)

ほうしゅう
没収 2042
かめつ 壊滅 363P

延鳥郎が

ところ、新羅から渡来した時に携え持っ

てきて、後年倭国の朝廷の所有物になつた品々

は、定かでないが、足高の玉(標註は延

喜神名式の備中国窪屋郡足高神社(岡山県倉

敷市笹沖)に祭られたものであるとする。鵜

鹿鹿の赤石の玉(播磨国明石郡の地による

かという) 膽狭溪の大刀(兵庫縣加古

川市の天伊佐佐比古神社(今、日岡神社に祭

られた大刀かという)等々、七物もしくはハ

物だ、たのかも知れない。(「重仁紀」三年三

日本書紀(上)日本書紀文学大系、岩波書店、二六〇頁、注五、二〇

月条。同八十八年七月条。「元神記」(参照)

①新羅から渡来した天日槍が所持していた宝物

②同じく新羅から渡来した延鳥郎が所持して

いた宝物

の双方を、記紀はあえて一緒にし、ごちやま

せに記述しているようにも思われる。(第八章「天日槍

あるいは、

へ中国(銅鐸の文化圏)が一瞬にして壊滅

した時、延鳥郎の大切な宝物であつた玉や大

刀等の全てが、倭国の朝廷に没収され、

天日槍が来朝の折に持ってきた宝物と同様の

④4523 新制 紀下352 帷 ④4561 紀小495 ④874 157年 ④876-3/2 ④48 1/2 表 (弥生時代) 663~671 「なほ」 天智2年 天智10年 ④892 9行 「かきあかせる」 ④892 5行 ④892 10行 ④892 16行 ④892 10行 ④892 16行

丁重な扱いを受けようになつた。
と、いうことを示唆してゐるのではなからうか。
一般的には、天智天皇の御世に、日鬼ノ城（七世紀後半）（総社市北方五・五里の）
鮮式山城が築かれたのであろうといわれ、朝
る。「西都大宰府」藤井功・亀井明德、日本
放送出版協会、一〇九頁。「旅」一九八三新
年号、日本交通交社、一一四頁参照）
とは、いえ、
へ、今に残る日鬼ノ城（朝鮮式山城）の壮
大な遺跡は、弥生時代後期の二・四世紀頃、延
鳥郎あまびの子孫達が、いざという時立て
籠り、戦う為に、大の勢力をもち、築きあげた城
塞なのであろう。《
ように観察される。（第三表 参照）
* 天智新制二年（六六三）の白村江における大敗
以降の防備については、第八十三章、八十四
章において述べたい。
「鬼ノ城」と大廻り小廻り「村上幸雄」乗岡実吉備人出版
「西都大宰府」

総社市
2.5万分の地図で
測定した、H18.8.11日

紀下 345⁹
578⁸ 128

東洋史稿 153³

891^p

① 「鬼」は、非常に勇猛な人、異種族の者、
 などを意味する。(「広辞苑」ハ「鬼」参照)
 ② また後代のことながら、百濟には「鬼室」とい
 う姓が見られる。(齊明六年九月五日条等
 参照)
 ③ また「倭国が討ち平らげた相手か、弱け
 小は価値は小さく、鬼のように強けぬは
 手柄話に」花が咲こうというものである。

米

うら 過羅を鬼に見えて、
前に 115行 と記述は、

端の 1414
虎の皮のふんどし
31%
29日告示

5月の環り
吉備津神社 104上
892-1/2
886-1/2 55行
「示す」この「示す」

「吉備津神社」104頁
4月卯日とあるが 886-1/2 14行
5月卯日の誤りと 大吉備津日子命
いう。

こと
886-2/2
4行

こういしたわけであらうと鬼と称するよ
の支配者達を恐ろしげな「鬼」と称するよ
うになつてゐたのであらうと思われざる
ようにして、「鬼」が韓国からの渡来人であること
を示すのに、虎の皮のふんどしをいめた
姿でもつて、端的に表現するなりとなつたのたうかや
*但し、往古に描かれた鬼の絵に、虎の皮のふん
どしをいっている例は見い出せない
尚、鬼が持つてゐる「鉄棒」は、製鉄技術
が存在したことを示してゐるという。(TV)
吉備津神社では、五月中卯の日を選んで卯
祭が行なわれる。俗におなご祭、或はおんな
ご祭とも云う。社伝によれば、鬼和祭の転訛
であらうという。大吉備津彦命の凱旋を記念
するものという。(「日本社寺大観」名著刊行
会、四三八頁、他参照)
強国、拘奴国を討ち滅ぼし、自国の領土
といた倭人達は、
吉備津彦命(伊佐勢理彦命)の鬼退治し
という英雄の噺として語り伝えていった
のたうかや

図版 197 参照

・カ-
 ・頁の上(4頁)、
 ・上へ大きくはみ出し掲載下さい。



892^p-3/2

1404
 写真版 197

鬼面

吉備津神社蔵

1204
 写真：岡山県立博物館

1304
 『吉備津神社・吉備津彦神社』神社紙行(36) 学芸研究社 2003年7月
 31日発行 又頁参照

(第3巻) 853

④ 1803^p-3/3
 ④ 2693^p-1/2 [鬼城コンクリート]

紀上84^P 27
紀上82^P 893^P

885^P
地図

「卯の目撃」> 前頁11行

新又中2708^P-2/3

物の怪 2198^P
和む 1655^P
宛 314

内^ちでは、

温羅^{うら}（

島郎^{うら}）

達^{たち}の

靈魂^{れいこん}が

物の

怪^けと

なつて祟^{たた}りを

する

のではな

かうか

と

恐れ

て

いたのかも知れない。

そこで、温羅達の靈を和ませる（なだめる）

為^{ため}に鬼和祭^{おになまひ}を行^{おこな}うようになつたのであろう

と推察^{すいさ}される。

今、鬼ノ城（鬼城山、四〇三ノミ）の東北ハ

〇〇ノミに温羅遺跡と称する所があり、西北一

・三ノミには岩屋がある（総社東部）国土地理

885^P
図左

第226

図

院、二万五千分之一地図参照

このあたりから

大ハ洲の一つである吉備子洲が静かに海に

浮んで見えたのだであろう。（神代紀）

＊以前は陸続きでなくて島だった

884^P
35行

そうぞ
曹操 1291^P

⑤12/2

元1291^P
曹操-魏の太祖 894^P
その祖 元和の祖

魏の太祖 43条2号 大夏

⑤1.2/2^P

895^P20^P

倭人伝を読む 20^P

基は170~80年。会稽郡の太守
これより早いのが知られる。

↑↑↑ 会稽郡太守・曹氏との盟約

長い長い戦乱 倭国大乱 一四七二一八
八年頃が、一応は峠を越したかに見えた西暦

一七〇一八〇年ころのことであつたろうか。あ

るいはこの大乱が終結した直後のことだった

かも知れない。(第3表参照) 1871^P54^P

博多鴻沖に浮かぶ志賀島の高穴穂宮におわす

成務天皇は、倭人のとて故郷と

郡の東治(もしくは温州)の地へ

いうべき会稽(重仁朝)の田道間守に引き続い

ていままた使者を遣わされたようである。1250^P1251^P

そのころの会稽郡の太守は、曹氏(三国時代の

魏国の始祖)曹操の先祖一族であつたと

氏の見解の一部をひきうつしてみよう。(倭

人伝を読む) 森浩一、中公新書、一九九二

〇八頁参照)

↑↑↑ 倭人伝

↑↑↑ 倭人伝

魏を建国したのは子の王であ
改行 前頁14行 改行
大カン7161
次改行

12/2, 12/19 - 1/2
1401 - 1/3
4592
895P

煉瓦 1347
1289
太字 7
昭和53年
427705
煉瓦 1347
1289
太字 7
昭和53年

前頁14行
車改行
418P

前
6行

12/19
1/2
未

(一五五二二〇)

の七文字があるで
こと有りや」となるが、
とよはれるようになった。
元空坑一号墓で、この墓を
群は曹氏一族のものとして推定
といえは、魏(曹魏)の創始者
である。したがって西暦一七〇
の七文字があるで
こと有りや」となるが、
とよはれるようになった。
元空坑一号墓で、この墓を
群は曹氏一族のものとして推定
といえは、魏(曹魏)の創始者
である。したがって西暦一七〇

一九七八年、中国の雑誌「文物」(通巻二
六七号)と「文物資料叢刊」(第二号)とに
一つの注目すべき資料が発表された。
それは、安徽省亳県の後漢時代の墓から発
掘された約一四〇点(現在は二〇〇点になっ
てゐると聞く)の文字を刻んだ磚(せん)
墓室の建築用材としての煉瓦(れんが)のうちの
点(てん)七四号磚)で、そこに

前頁へ移す。

けんとし 産産・産産大カン 2242^p
 秋支後53
 倭人伝を読む199^p

こと

896^p

倭人伝 201^p
 転写 860^p-73
 1212^p

改行

ころと推定される元宝坑一号墓から発見され
 た日倭人傳は魏志倭人伝に記載されている魏
 になつてからの倭人社会との外交関係（つま
 り卑彌呼や曹芳の遣使）の前史の可能
 性をもつ資料であることはいうまでもない
 とう（倭人伝を読む）森浩一、中公新書、一九
 九一、二〇八頁。他参照）

壹與（宋本太平御覽には壹與とある）
 大和 587
 宋 ほう たい かい ぎ さん
 と 二

会稽と倭人
 かい けい
 わ じん

発掘資料としての日倭人傳の文字は、文
 献中の文字のように転写に転写を重ねて今日
 に伝えられてきたのではなく、二世紀の文字と
 う美が重要である。

前頁17
 小林 240

前頁17

こと

H18(2006)8.14⑤
H30(2018)1.31(49~2.3(5回))P
H30(2018)12.13~12.14(3回)記小484
令和元(2019)5.14(1)~5.15(3回)⑧84P頭
令和元12.14(1)~12.16(4回)
令和2.8.18(1)~8.20(4回)
令和3(2021)4.11(1回)⑩

559.2.14
後にも読む 203
897P
895.14P

大カマ720P
帷 マトタカ
ウ バレコ
キ ヒ
又 4エ7席⑥H152.19⑤
後人伝説 202P

ニと

一、号墓の被葬者が生前に会稽郡の太守を
いたふ。かうかがえることもわたり(森浩一氏)の注目
した理由である。会稽関係の文字專一六頁が
見出し出されてゐる。としては、次の

会稽(一)

会稽曹君(二)

会稽曹君喪軀(三)(喪はうしなう。軀は、からだ。)

会稽曹君天年不幸喪軀(四)

念 会稽府君棄離帷屋(五)

会稽明府早棄春秋不竟世(六)

出土の「倭人埴」

つまり、元宝坑一号墓とあって、曹氏

と倭人をつなぐ土地の会稽の重要性が、よ

り鮮明に浮かび上がったといえよう。倭人

伝を読むと森浩一、中公新書、二〇一、二〇

三頁参照)

あるいは、魏曹魏と倭国との間の絆は、

早くもすでに、成務天皇(在位一三一

一、九〇)の御代に形成されていたのかも知

れない。

大カマ720P
2003

225

1336

干支表

1 甲子	2 乙丑	3 丙寅	4 丁卯	5 戊辰	6 己巳	7 庚午	8 辛未	9 壬申	10 癸酉	11 甲戌	12 乙亥	13 丙子	14 丁丑	15 戊寅	16 己卯	17 庚辰	18 辛巳	19 壬午	20 癸未	21 甲申	22 乙酉	23 丙戌	24 丁亥	25 戊子	26 己丑	27 庚寅	28 辛卯	29 壬辰	30 癸巳	31 甲午	32 乙未	33 丙申	34 丁酉	35 戊戌	36 己亥	37 庚子	38 辛丑	39 壬寅	40 癸卯	41 甲辰	42 乙巳	43 丙午	44 丁未	45 戊申	46 己酉	47 庚戌	48 辛亥	49 壬子	50 癸丑	51 甲寅	52 乙卯	53 丙辰	54 丁巳	55 戊午	56 己未	57 庚申	58 辛酉	59 壬戌	60 癸亥
177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118
117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58
57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	前1	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123
124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183
184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243
244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303
304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363
364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423
424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483
484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543
544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603
604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663
664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723
724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783
784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843
844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903
904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963

『新・おまじろ話』末尾から転写して下さい。

表：

写真図版：

番号	卷	頁	番号	卷	頁	番号	卷	頁	番号	卷	頁
1	1	36	51	1	361	101	2	102	151	2	307
2	1	37	52	1	372	102	2	104	152	2	322
3	1	58	53	1	376	103	2	105	153	2	323
4	1	71	54	1	377	104	2	107	154	2	326
5	1	84	55	1	385	105	2	108	155	2	327
6	1	85	56	2	9	106	2	112	156	2	328
7	1	86	57	2	10	107	2	119	157	2	329
8	1	87	58	2	11	108	2	124	158	2	335
9	1	90	59	2	12	109	2	126	159	2	360
10	1	91	60	2	13	110	2	126	160	2	363
11	1	92	61	2	15	111	2	128			
12	1	96	62	2	17	112	2	134			
13	1	97	63	2	17	113	2	135			
14	1	100	64	2	18	114	2	137			
15	1	101	65	2	19	115	2	138			
16	1	103	66	2	23	116	2	146			
17	1	116	67	2	24	117	2	147			
18	1	134	68	2	30	118	2	149			
19	1	135	69	2	31	119	2	152			
20	1	143	70	2	33	120	2	170			
21	1	160	71	2	35	121	2	172			
22	1	167	72	2	35	122	2	172			
23	1	170	73	2	35	123	2	173			
24	1	194	74	2	34	124	2	174			
25	1	203	75	2	34	125	2	174			
26	1	218	76	2	34	126	2	177			
27	1	219	77	2	41	127	2	177			
28	1	220	78	2	44	128	2	180			
29	1	248	79	2	46	129	2	181			
30	1	277	80	2	50	130	2	185			
31	1	279	81	2	51	131	2	186			
32	1	281	82	2	54	132	2	194			
33	1	282	83	2	55	133	2	200			
34	1	284	84	2	57	134	2	214			
35	1	286	85	2	60	135	2	219			
36	1	295	86	2	61	136	2	225			
37	1	306	87	2	69	137	2	241			
38	1	306	88	2	73	138	2	242			
39	1	306	89	2	74	139	2	249			
40	1	306	90	2	74	140	2	260			
41	1	306	91	2	75	141	2	264			
42	1	306	92	2	80	142	2	270			
43	1	311	93	2	82	143	2	281			
44	1	314	94	2	83	144	2	288			
45	1	315	95	2	87	145	2	289			
46	1	318	96	2	89	146	2	291			
47	1	325	97	2	94	147	2	293			
48	1	352	98	2	95	148	2	299			
49	1	352	99	2	96	149	2	300			

図

番号	巻	頁	番号	巻	頁
161	3	16	207	3	522
162	3	51	208	3	595
163	3	83	209	3	601
164	3	143	210	3	603
165	3	194	211	3	610
166	3	239	212	3	620
167	3	242	213	3	636
168	3	261	214	3	641
169	3	281	215	3	642
170	3	282	216	3	643
171	3	283	217	3	651
172	3	284	218	3	652
173	3	289	219	3	685
174	3	292	220	3	688
175	3	295	221	3	689
176	3	296	222	3	690
177	3	303	223	3	691
178	3	306	224	3	696
179	3	307	225	3	788
180	3	314	226	3	844
181	3	315			
182	3	346			
183	3	349			
184	3	356			
185	3	361			
186	3	362			
187	3	363			
188	3	365			
189	3	384			
190	3	388			
191	3	389			
192	3	393			
193	3	418			
194	3	441			
195	3	442			
196	3	473			
197	3	474			
198	3	475			
199	3	485			
200	3	486			
201	3	489			
202	3	490			
203	3	493			
204	3	512			
205	3	514			
206	3	515			

表

番号	巻	頁
16	3	19
17	3	24
18	3	44
19	3	202

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
105	3	39	152	3	419
106	3	40	153	3	419
107	3	52	154	3	420
108	3	67	155	3	421
109	3	68	156	3	425
110	3	84	157	3	429
111	3	85	158	3	430
112	3	88	159	3	431
113	3	104	160	3	432
114	3	107	161	3	433
115	3	195	162	3	434
116	3	196	163	3	436
117	3	212	164	3	439
118	3	213	165	3	441
119	3	246	166	3	444
120	3	250	167	3	447
121	3	252	168	3	479
122	3	255	169	3	491
123	3	256	170	3	504
124	3	256	171	3	519
125	3	256	172	3	526
126	3	257	173	3	533
127	3	260	174	3	545
128	3	261	175	3	599
129	3	261	176	3	599
130	3	268	177	3	605
131	3	268	178	3	606
132	3	269	179	3	613
133	3	272	180	3	618
134	3	299	181	3	619
135	3	316	182	3	621
136	3	317	183	3	622
137	3	320	184	3	624
138	3	344	185	3	631
139	3	348	186	3	645
140	3	351	187	3	653
141	3	354	188	3	697
142	3	364	189	3	697
143	3	364	190	3	697
144	3	382	191	3	698
145	3	396	192	3	699
146	3	401	193	3	733
147	3	407	194	3	734
148	3	408	195	3	738
149	3	409	196	3	755
150	3	410	197	3	853
151	3	412			

〔著者紹介〕

古閑 炯作

昭和16年（1941年）5月に生まれる。

■著書

・『小野小町』（株）新人物往来社〔現在、株式会社KADOKAWA〕。

（『新・やまと物語』の末尾あたりから一部抜粋）

・『新・やまと物語』第一巻～第二巻まで刊行。株式会社KADOKAWA。

*『小野小町』は、非常に興味深い筋書きとなっています。
第2刷（91頁）「第九十三章」から読んでいたきたいと思います。

862/862

令和3（2021）5.28
3人3人から返却員確認中。①②